様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２４年５月１６日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008 年度　～　2010 年度
課題番号：20791729
研究課題名（和文）　医療を受ける幼児聴覚障害児の適応への支援に関する研究

研究課題名（英文）　A study of Support in adaptation of a hearing impaired children in the hospital

研究代表者
藤井　加那子(KANAKO FUJII)
宮崎大学・医学部・助教
研究者番号：30404403

研究成果の概要（和文）：幼児聴覚障がい児の入院生活への適応を促す看護ケアを検討した。看護師は障がいを意識した上で、子どもの持つ感覚を活用し、情報を得にくい児の状況を理解した上で「児が理解できる」ことを大切にしていた。また、聴覚障がい児の親からは診療や入院場面での子どもへの接し方、医療者と親の協力、要望についての意見が出された。これらから、幼児聴覚障がい児への関わり方に対する看護の示唆と具体的方法が得られた。

研究成果の概要（英文）：The nursing care which stimulates adaptation to a hospitalization life of young children with hearing impaired was considered. When nurses cared hearing impaired children, they were concerned about children's impaired. Nurses utilized the feeling which children have, when caring to children. Moreover, they considered that hearing impaired children hard to get information about hospitalization. In addition, Nurses made much of the fact that children comprehend all situations in hospital.
And, I interviewed hearing impaired children's mothers. Children's mothers hoped to improve that care of their children when they checked with the doctor or a hospitalization.
The above researches gave the suggestion and the specific method of caring for hearing impaired children in hospitalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学
キーワード：聴覚障碍児、入院生活、コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

「聴覚障がい」は「耳が聞こえない障害」だけでなく，「言語的コミュニケーションの問題」という二次的な問題が存在するため，聴覚障がい者（児）が受診・入院した際には情報伝達方法と共にコミュニケーション方法を確保することが欠かせない。

子どもにとって入院とは，生活の場が変化することである。これは単なる「場所」の変化だけでなく，治療という状況が与える生活そのものの変化でもあり，子どもにとってストレスフルな体験となる。特に幼児期の聴覚

障がい児の場合，発達段階による言語能力の未熟さに加え，コミュニケーション手段（手話・指文字・筆談）の獲得も不十分なため，他者との意思疎通は難しい。そのため，入院に伴う様々な変化や出来事に対する不安を和らげ，その適応を助けることは看護師の重要な役割である。

しかし，聴覚障がい児に関する研究は，主として教育学の分野における口話コミュニケーションに関するものや，日本語能力・学力に関する研究がほとんどで、聴覚障がい児への看護援助に関する研究はほとんど行われていなかった。先行研究は一般的な検査時の看護の中で語られているものや，総論的なものが中心である。聴覚障がい児とのコミュニケーションに焦点をあてた研究も澁谷が行った以外は，事例報告が数件あるのみである。聴覚障がい児の医療現場における看護支援について十分に検討されておらず，援助の方向性が明らかにされているとは言えないのが現状であった。

２．研究の目的

「聴覚障がい」と「コミュニケーションの困難さ」から生じる，聴覚障がい児の医療の場における困難さや必要とされている援助について，明らかにしていく必要がある。

本研究では聴覚障がい児が様々な困難に出逢うと予測される入院生活に焦点をあて，どのような場面に困難を感じ，対処しているのかを把握し，聴覚障がい児の入院生活への適応を促す看護ケアを検討することを目的とする。

１）聴覚障がい児が入院生活の中で経験している戸惑い・困難を把握する
２）聴覚障がい児が戸惑い・困難に対する対処を明らかにする
３）聴覚障がい児の対処を助けるために親・看護師が行っている支援を明らかにする
４）上記の結果より，聴覚障がい児の入院生活への適応を促す看護ケアを検討する

３．研究の方法

１）文献検討

聴覚障がい児が医療の場で経験している困難の現状を検討するため、文献検討を実施した。聴覚障がい児の医療場面での困難について，MEDLINE，CINAHL，医学中央雑誌を用いて過去 10 年間の国内外の文献検討を行った。集められた 14 件の文献を、聴覚障がい児の状況理解・障害認識、医療の場で起こる出来事への児の対応、聴覚障がい児の医療への参与、聴覚障がい児-医療者のコミュニケーション 4 つ視点から内容を分析した。

２）看護師の援助に関する質的研究

看護師が医療を受ける重度の聴覚障がい児をどのような存在と認識し、援助をしているかを明らかにすることを目的とし、インタビューを行った。

①.研究対象者：耳鼻咽喉科に 2 年以上所属している、臨床経験 3 年目以上の看護師。
②研究方法：質的帰納的アプローチによる因子探索型研究方法を用い、インタビューガイドを用いた半構成的面接法にてデータ収集を行った。面接内容は対象者の同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。データはコード化を行い、カテゴリー化を行った。
③倫理的配慮：本研究は宮崎大学医学部医の倫理委員会の承諾を得て実施した。

３）聴覚障碍児の母親との意見交換会

聴覚障がい児の母親に子どもへの接し方での留意点や医療機関受診時の子どもの様子、医療者への希望等、子どもと医療スタッフの関わり方に関する意見交換を行った。

４．研究成果

＜文献検討＞

１）聴覚障がい児の医療の場で出会う出来事への対応

聴覚障がい児が医療処置などに対する対応について記述した文献は見いだせなかったが、治療に伴う生活の変化に対する児の対応について述べている文献は 2 件あった。これらの文献から，聴覚障がい児は新しい体験に不安を感じやすく，環境の変化に敏感であることが読み取れた。しかし，それが聴覚障がい児の特徴なのか，年齢，発達によるものなのか，事例独自のものなのかは患児の反応についても詳しく検討されていないため，明確にできていない。

２）聴覚障がい児の医療への参与について

聴覚障がい児の医療に対する参与は日々の処置や援助に関わる内容の文献と、治療方針の決定に関わる内容の文献に分けられた。

文献の検討から、プリパレーションの必要性は認識されているが，実際の内容・方法は十分に評価されておらず，実態はほとんど明らかにされていない現状が明らかとなった。人工内耳移植に関しては効果や文化的な面からの多様な意見があるため，インフォームド・コンセントの内容について検討する必要があることを多くの文献が取り上げていた。しかし，実際に使用する児へのインフォーム

ド･アセントの視点に立った考察がされている文献は見あたらなかった。

３）聴覚障がい児の医療者とのコミュニケーションについて

聴覚障がい児が医療者とのコミュニケーションの中でどのようなことに困難を感じているかという視点で記述した文献は見いだせなかった。聴覚障がい児と医療者のコミュニケーションについて書かれていた文献は 4 件存在したが、これらの文献は医療者がどのように聴覚障がい児のコミュニケーションを行うかという視点で記述されていた。主として，聴覚障がい児とのコミュニケーション方法は手話か筆談，読唇術を用いられ，児のコミュニケーション方法を把握しながら数種類を組み合わせて行っていた。

これらの文献により，児とのコミュニケーションには様々な方法が用いられているが，コミュニケーションは患児の年齢や発症時期の影響を受け，児の既往によってコミュニケーションの困難さは異なることが明らかにされていた。

＜看護師の援助に関する質的研究＞

インタビューにより得られたデータから抽出されたコード数は 575 であった。これらのコードより 21 のカテゴリーと 47 のサブカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは抽象度の高い順にカテゴリー【】、サブカテゴリー≪≫、下位カテゴリー＜＞、代表するコードを［］として示す。

１）看護師が捉えている子どもの姿

聴覚障がい児と関わる看護師は、≪視覚を使って情報収集をする≫≪子どもの持っている感覚や出来る方法でコミュニケーションをする≫といった、これまでの生活の中で子どもが身につけた【聴覚以外の感覚を活用する】方法を用いて他者や環境に対して主体的に関わろうとしている姿を捉えていた。一方で、子どもは障がいがあるために生活や他者とのコミュニケーションに不自由する様子を捉えて【聞こえで不自由している】とも感じていた。

また、入院初期の≪医療者や見知らぬ人・出来事を寄せ付けない≫様子や、入院生活の様々な場面で≪母親の存在を求める≫といった、普段とは違う環境において子どもが警戒心を強めて過ごす【見慣れぬことに警戒する】様子を捉えていた。そして、≪経験から得た学びを生活に活かす≫≪痛い経験を忘れない≫といった、経験や集めた情報を蓄積して子どもなりに対処している姿を捉えて、【経験したことがその後の取り組みに影響する】と認識していた。入院初期には警戒する一方で、生活に慣れてくると看護師や同室児に関わってくる【人との関係を求める】存在であるとも捉えていた。

２）聴覚障がいを意識した看護実践

看護師は子どもと関わる際に≪子どもの視覚を大切にして関わる≫≪表情に気をつけて関わる≫など子どもにとっての視覚情報の重要性を意識しており、【子どもの視覚を意識する】ように子どもと接していた。ジェスチャーや絵をはじめとした子どもが用いる方法は通じ合えることから≪子どものコミュニケーション方法を自分も使う≫ことや、≪子どもと視線を合わせてコミュニケーションをする≫といったコミュニケーションをとる姿勢を整えるなど【障がいを意識したコミュニケーションをする】ことを意識して行っていた。また、子どもとの言語的コミュニケーションが難しい状況があるため≪母親から子どもを理解するための情報をもらう≫や≪母親を巻き込んで子どもと関わる≫といった【母親の協力を得て子どもに関わる】ようにしていた。

子どもにケアを行う際には、聴覚による情報が得にくいため≪その子のペースで進める≫ことや≪子どもの興味を優先する≫といった【子どもの反応を見ながら関わる】ことに配慮していた。同時に［大切なことはどうにかして伝える］などの≪子どもにきちんと説明する≫や≪子どもの理解を確認する≫など、言葉が伝わりにくいことを意識して、【子どもが理解してその場に居るようにする】ことに注意を向けていた。そして、聴覚情報による危険予測が出来ないことから【子どもの安全を守る】ようにしていた。

日常のケアでは言語的コミュニケーションが難しい分、子どもの気持ちや看護師に伝えたいことを≪子どもの表情や仕草から読み取る≫といった子どもの観察を通して把握し、【子どもからの訴えを知ろうとする】として関わっていた。

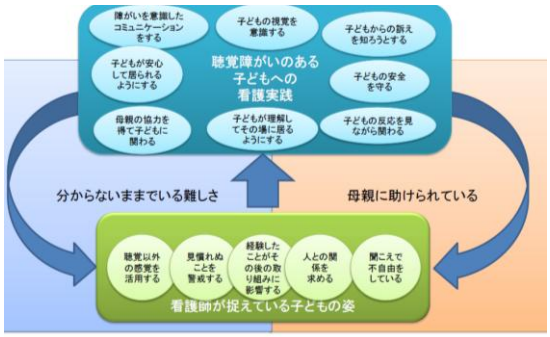
また、入院初期に警戒する子どもに対して、一緒に遊ぶなど［自分が「怖い存在」ではないことを見せる］といった関わりを通して≪「安全な存在」として認識される≫ようにしたり、積極的に子どもと関わることで≪子どもと関係を築く≫ようにしていた。処置の際には、児の障がいを考慮して［処置中は母親の顔が見えるようにする］といった≪処置時には母親に一緒に居てもらうようにする≫などを行い、【子どもが安心して居られるよ

うにする】ように関わっていた。

３）看護実践の中で生まれる感覚

看護師は、看護実践の中で母親が看護師と子どもの間を取り持ち、言語で表せない子どもの訴えを看護師に伝える場面を繰り返し体験することで、自分の看護実践は≪母親に支えられている≫といった【母親に助けられている】感覚があると感じていた。一方で、母親に助けられる状況について［看護師の狼狽が母親を混乱させるのではないか］［母親も子どもの入院を不安に思っている］といった≪母親自身もケアの対象者である≫ことを意識していた。

また、看護師は子どもとの関わりで＜コミュニケーションの難しさ＞を認識しており、＜伝わったかの曖昧さ＞や＜子どもの本当の訴えがわからない＞など≪子どもの求めるニーズを把握できない≫難しさを抱えていた。そして＜自分のアセスメントや実践に自信がもてない＞などの≪看護実践に自信をもてない≫と合わさり【分からないままで関わる難しさ】を抱きながら看護を行っていた。



聴覚障がいのある子どもへの看護実践の構造図

子どもと直接に言語的コミュニケーションが行えない中、看護師は聴覚以外の感覚を活用したり、母親の通訳を得たりしながら子どもの看護を行っていた。しかし、言葉で確認ができないため、子どもの気持ちやニーズに添った看護を行えたという実感を得ることは難しいと感じていることが明らかとなった。

＜聴覚障がい児の母親との意見交換会＞

聴覚障がい児の母親たちと交流会を持ち、子どもとのコミュニケーションや関わり方についての意見を交換した。

その内容を整理したものを以下に挙げる。

１）聴覚障碍児に関わる際に母親が意識している点

①子どもと視線を合わせてコミュニケーションをする

②子どもが見ることができる形にする

③何かを説明する時は、文字（名称）と絵（実物）を一組にして、別々には伝えない。

④伝えようとしていることが伝わりにくいときは、互いに手話を繰り返して、互いに理解できるまで続ける。

２）医療機関受診時の子どもの様子

①診察や検査で何が起こるのか、自分が何をするのかがわからなくて戸惑う。

②親が一緒なので、あまり混乱や不安を感じている様子はない。

３）医療者に対する思い

①医療者の関わりについて

・看護師から『お母さん教えて下さい』と言われてから、子どものことを伝えやすかった。

②支援ツールについて

・写真があるとある程度子どもは分かるため、写真を用意してもらえると良い。

・検査や診察は流れを１つ１つの行動ごとに写真や絵で示してもらうと、子どもも自分がどういう行動をしたら良いかが分かる。

③その他

・診療科によって随分関わり方が違う。

◆研究成果より得られた看護への示唆

以上の研究結果より、聴覚障がい児の入院生活を支援するための看護ケアへとして、以下のケアが重要であると考えられた。

１）子どもが入院による様々な変化を認知、理解しやすいように、新しい出来事には細かな視覚的情報の提供を行い、子どもが理解をしてから行う。

（例）入院生活の１日の流れを写真で紹介する。
検査などは視覚的情報と子どもの体験が結びつくようにする。

２）家族（特に母親）と協働し、子どもに関わる情報を密に交換する。

（例）子どもとのコミュニケーション手段の確認
「子どもに伝える技術」をもつ母親の力を活用する。

３）子どもの視覚や触覚を活かした日常的な関わりを行い、子ども・看護師双方が互いの表現方法を知る。

４）子どもが不安を感じやすい場面（検査、診察、侵襲的処置）には、家族（特に母親）が側に居るようにする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①藤井加那子、聴覚障害児が医療の場で受ける困難に関する文献検討、南九州看護研究誌、第 7 巻 1 号、17―24、2009 査読有り

〔学会発表〕（計１件）
①藤井加那子、幼児期にある聴覚障害児の適応に関する認識～看護師の視点から～、第 20 回日本小児看護学会学術集会、2010.6.26～27.

６．研究組織
(1)研究代表者
藤井　加那子（KANAKO FUJII）
宮崎大学・医学部・助教
研究者番号：30404403